研究ノート

チャイコーフスキイの交響曲第６番副題邦訳に関する問題

一柳富美子

――要旨

ロシアの作曲家ピョートル・チャイコーフスキイ（1840～93）の遺作となった交響曲第６番には作曲家本人の手によって “Патетическая [Pateticheskaja]” という標題が付けられている。いわゆるチャイコーフスキイの「悲愴」である。実はこの邦訳は誤りであり、ロシアのチャイコーフスキイ学者たちからも以前より訂正を求められている。しかし日本の自称「チャイコーフスキイ研究家」たちは「これはチャイコーフスキイがフランス語で書いたのだからこの訳は正しい」と主張して譲らない。ところが、実際にはフランス語とロシア語には意味の違いはなく、共に「パトスに満ちた」「感動的な」という意味で、しかもチャイコーフスキイは総譜の表紙にはロシア語で標題を書き込んでいたのである。

本稿は、クラシック音楽の重要作品の邦訳に関して、誤解が生じた経緯と背景を検証すると共に、音楽研究への取り組み方そのものについて考察する試論である。なお、本来「論文」とすべき内容を目指していたが、日本初演データの確定が未だ解決しておらず、今回は「研究ノート」としたことを、最初にお断りしておく。

0.　はじめに

殆どのヨーロッパ言語から遠い距離を持つ日本語は、他の欧州言語ではあり得ない翻訳問題を抱えている。例えば、有名なシェイクスピア「ハムレット」の “To be, or not to be, that is the question. ---” に何十種類もの日本語訳が存在して、未だ正解に辿り着かないことをドイツ人やロシア人に話すと、皆、一様に驚愕する。そもそも英語の be 動詞に相当する動詞が日本語には無いこと、また一般に名詞複数形が存在しないこと、逆に一人称単数を表す人称代名詞が 20 種類以上もあること……等など、日本語と印欧諸言語との文法的隔たりには凄まじいものがある。

文法構造、いわゆるシンタックスの側面のみならず、個々の単語の翻訳にも難儀することが少なくない。大抵はギリシャ・ラテン語を起源とするケースが多く、表音文字を用いている欧州各国語では自国の流儀に少し合わせるだけで外来語が出来上がってしまう。例

えば、「知性・理解」を意味する各国語は intelligence（英語）、intelligence（フランス語）、Intelligenz（ドイツ語）、intelligenza（イタリア語）、inteligencia（スペイン語）、интеллект（ロシア語）、などとなっていて、ラテン語の intellectus が語源である。

科学の進歩によって誕生する新語も欧州各国語は共通の語源に依っている。radioactivity（英語）、radioactivité（フランス語）、Radioaktivität（ドイツ語）、radioattivite（イタリア語）、radiactividad（スペイン語）、радоактивность（ロシア語）は全て「放射能」を表す各国語の単語であるが、「放射能」という全く別概念から生まれた日本語の存在を欧米人は容易に信じない。「だってこれは最先端科学の知識に基づいて作られた新語なのだから、日本語であれ中国語であれ、radio と act を含まない名称が存在するわけが無い」と、かつて留学先で知り合ったドイツ人物理学専攻学生と大議論になったことを今でも記憶している。ことほど左様に、セマンティクスに於いても日本語と欧州言語との違いは大きい。

このような言語的特質を踏まえると、明治以来日本に導入された新しい概念や事物を翻訳する際に、誤ってしまう可能性は決して低くないと想像できる。文学の翻訳となると話は更に複雑化し、単語レヴェルでは殆ど何も解決できず、結局、文化そのものを翻訳することになる。昔の日本人男性が女性に向かって「貴女が好きです」とは言わなかったことを踏まえて、I love you. を「月がきれいですね」と夏目漱石が訳した逸話は有名である。本稿はそこまで複雑な話ではなく、寧ろ特定の単語をどう訳すかという、一見単純な話である。が、日本の輸入文化に仕掛けられた二重三重のトラップの所為で、たった一単語の誤訳が大きな誤謬を生み出したその謎解きと結末を記したものである。

1. 誤訳の誕生

1-1 音楽作品タイトル邦訳の難しさ

音楽作品の標題邦訳は、その作品が日本に初めて紹介されるときに必要となる。現在のように、音楽事典、作品名辞典のような類が普及すると、初演されていない作品でも出版の都合で音楽作品名を邦訳せねばならなくなる。実際、筆者も 1980 年代〜1990 年代初めに大規模な翻訳作業が行われた『ニューグローブ世界音楽大事典』（講談社）全 21 巻別巻 1 のロシア音楽項目を担当した時、今まで聴いたことも演奏したこともない歌曲やオペラのタイトルをどう邦訳したらよいか、散々迷った。現代のようにネットですぐに音源が見つかったり、オペラの粗筋も容易に追いかけられる時代ではなかったので、30 年以上経った現在、日本語版を読むと赤面してしまう翻訳が少なくない。

筆者が担当したものではないが、しばしば話題になるのがチャイコーフスキイの歌劇 “Чародейка [Charodejka]” で、この作品は本国ロシアでもこれまで滅多に上演されず、日本では国内盤の音源すら存在していない。勿論、万人が孫引きする悪しきネット辞典 Wikipedia の日本語版にも解説は載っていない。つまり参考資料が入手し難いのである。日本でチャイコーフスキイ学者と言われてきた某氏は、音をそのまま「チャロデイカ」と

カタカナ表記して対処した。またかつてロシア歌曲の権威と見做されていた某女史は辞書の翻訳からとって「魔女」と訳した。実態はともかく、「魔女」の方がまだ良心的で、カタカナだと何が何だかさっぱり分からず、固有名詞と勘違いする受け手もいる。ある町の太っ腹で美しい女領主が、仲の悪い隣町の町長に横恋慕され、しかもその息子と恋に落ち、町長の妻の手で最後は非業の死を遂げるという粗筋で、「チャロデイカ」はこの女領主を指していた。従って、筆者は「魔性の女」と邦訳している。ロシア語で「魔女」を指す言葉は何種類か存在するが、この чародейка [charodejka] は中世の教会スラヴ語 (1) に於いては「信仰心を惑わす悪しき存在の一人」として紹介され、単に超常現象を起こす人物ではなかった。この歌劇の中でも、人々の心を誘惑する、現代風に言えば「人たらし」のような魅力的な女性として描かれている。実態が分からないとどうにも手の付けようがない好例であろう。

音楽作品においては、レコード会社が売りやすくするために扇動的な副題を付けることもある。筆者が専門のロシア音楽に関して言えば、ショスタコーヴィチの交響曲第五番は勝手に「革命」という副題が付いているが、中身は革命とは無縁の、極めて個人的な内容の交響曲である。ロシア革命 20 周年記念演奏会用に依頼され初演されたので「革命」と命名され、ベートーヴェンの第五番「運命」と共に、クラシック・オタクの間では親しまれてきたが、作曲当時のショスタコーヴィチの事情が判明すると、最近ではこの「革命」という副題に抵抗する愛好家が増えている。同じくショスタコーヴィチ交響曲第 14 番は全 11 楽章からなる声楽付きの型破りの交響曲で、各楽章ともに人間の様々な死を扱った歌詞が付いていることから、これまたレコード会社が国内盤を初リリースするときに「死者の歌」という副題を付け足してしまった。このような例は枚挙に暇がない。そして例外なく、こうした副題は一人歩きして、広く敷衍するのである (2)。

1-2　交響曲第６番日本初演について

現在、筆者は科研費プロジェクトとして日本におけるロシア音楽作品初演データを収集・整理している。オペラや大規模管弦楽曲の初演は演奏団体がはっきりしているので初演データは集めやすいが、歌曲やピアノ独奏曲・室内楽となると、多分に個人の差配で実現してしまうので、初演データを確定するのは困難である。その点、チャイコーフスキイの交響曲第 6 番は管弦楽作品で、指揮者とオーケストラとそれなりの会場が必要なので、初演データは分かると踏んでいた。ところが、いざ、プロジェクトを開始すると、2 年経っても「交響曲第６番日本初演」を発見できなかったのである。

一つ分かっているのは、日本最古の職業オーケストラである新交響楽団（現在の NHK 交響楽団）の前身がロシアのオーケストラと合同で 1925 年に開催した日露交歓交響管弦楽演奏会で 4 月 27 日にこの曲を京橋区（当時）の歌舞伎座で演奏しており、その時点でプログラムには既に交響曲第６番「悲愴」と邦訳が付けられていたということである。このイヴェントを牽引したのが山田耕筰（1886-1965）なので、山田が思いついた邦訳とも考え

られるが、音楽家の山田には邦訳そのものに携わる機会は多くなかったろうと推測できる。それよりも、大正から昭和の初めに掛けて、数々のクラシック音楽を日本へ紹介した音楽評論家大田黒元雄（1893-1979）が留学先の英国で学んだ知識を下敷きに、ロシア語→英語→日本語の重訳を行った結果の可能性が高い。

また、職業オーケストラ以前に、明治・大正期には帝大などの学生オーケストラが積極的に日本初演を行ってきたので、1925 年以前に、既に「悲愴」という邦訳が存在した可能性もある。井上登喜子氏の研究 (3) によれば、1913 年 6 月 29 日に慶應義塾大学が、1914 年 5 月 30 日に学習院大学が、1918 年 12 月 1 日に京都帝国大学が、1922 年 6 月 10 日に学習院大学が、そして 1922 年 6 月 30 日には東京帝国大学が、レパートリーに初めてロシア作品を入れているので、慶應が初めてロシア物を取り上げた 1913 年から山田耕筰が指揮した 1925 年までの間に、このチャイコーフスキイの交響曲第 6 番が日本初演されて、「悲愴」という副題邦訳が誕生したのかもしれない。アマチュア団体の初演データも、前述した科研費プロジェクトに含まれているので、プロジェクトが進行すれば、いずれは交響曲第 6 番の初演及び邦訳者が明らかになろう。本論文で確定したかったが間に合わず、更に調査を進めて、次の機会にこの邦訳者が決定できたらと考えている (4)。

1-3　誤訳の誕生

正確な意味を知る以前は誤訳には気付かず、誰も異議を唱えないものである。「悲愴」に関しても同様で、長い間、「悲愴」は正しい邦訳であると見做されて、一時は一部の露和辞典 (5) にも「悲愴な」という訳が掲載されていた時期があった。

「悲愴」という邦訳に疑問を抱いたのは、実は他ならぬこの筆者であり、それは 1990 年の秋にロシア人ピアニストのレッスン通訳をしていたとき (6) だった。日本人ピアノ科音大生がレッスン受講中にそのロシア人は「Патетически [pateticheski]」と叫んだのである。この単語はチャイコーフスキイの第 6 交響曲に付けられた副題と同じ語源の副詞で、「うんと気持ちを込めて」としか訳せない状況での発言だった。筆者は大変驚いたが、レッスンを成立させることが最優先だったので、「もっと気持ちを込めて、感動的に」と訳した。レッスン後に幾つかの露和辞典で調べたら、コンサイス以外の辞書には「感動的に」「熱い想いで」「パトスに満ちて」という訳語が載っており、当然ではあるが、ロシア人ピアノ教師の発言は理に適ったものと再確認できたことを、今でも鮮明に覚えている。

何故、ロシア語辞書にも載っていない全く違う邦訳が一人歩きしてしまったのか？　その時から、筆者の誤訳修正行脚が始まった。真っ先に頭を過ったのは、ベートーヴェンのピアノソナタ第 8 番の副題 Pathetisch の邦訳「悲愴」だった。ベートーヴェン生前の出版譜にはフランス語の pathétique が添えられていて、実は、こちらもチャイコーフスキイの交響曲と同じような誤訳問題を孕んでいる。日本初演はチャイコーフスキイの第 6 交響曲より早いことも分かっていて、このベートーヴェンのピアノソナタ副題がチャイコーフスキイの交響曲へ横滑りした可能性が大きい。ただ、チャイコーフスキイのそれとは違って、

大曲でも遺作でもないので、問題視されていないのかもしれない。

2. патетический [pateticheskij] とは？

では、そもそも「悲愴」という名詞に誤訳されたチャイコーフスキイの交響曲第 6 番の副題原語はどのようになっているのだろうか？　実は、交響曲《悲愴》ではなく、《悲愴交響曲》と、名詞「交響曲」の前にそれを修飾する形容詞 патетический [pateticheskij] が置かれた形となっている。ロシア語では、交響曲 симфония [simfonija] は女性名詞なので、これに付く形容詞も女性形をとり、патетическая [pateticheskaja] となる。チャイコーフスキイが総譜第 1 楽章冒頭に書いたフランス語も、またベートーヴェンのピアノソナタ第 8 番も全て、形容詞 pathétique である。

2-1　語源はギリシャ語、欧州言語に広まる

辞書の見出し語となっているのは、この патетическая [pateticheskaja] の男性形 патетический [pateticheskij] で、語源は古代ギリシャ語のパトス πaθος「哀感・熱情・感動」である。この名詞から派生した形容詞パテティコス πaθητικός「感情を感受しうる、感動的な、情動的な」のロシア語バージョンが第 6 交響曲に自筆で書かれたことになる。ロシア語は正教会を通じてギリシャ語との距離が西欧諸語よりも近いが、他の欧州各国語はギリシャ語 πaθητικός → πaθητός とさらにラテン語の形容詞形 patheticus を経由して発展していったようである[7]。この πaθητός 及びラテン語経由の段階で、古代ギリシャ語 πaθητικός には本来にはなかった意味が付加されたと考えられる。

以上のような経緯があるので、幾つかのヨーロッパ言語を調べてみた結果、興味深い事実が浮かび上がった。πaθητός に源を持つ各国語は、大きく分けると次の二つの意味を持っている。

① πaθητικός 本来の意味に忠実な「感動的な、感情の籠もった、パトスに満ちた」

② πaθητός 寄りの「苦悩する」から派生した「悲愴な、悲痛な」

そして言語によって、また時代によって、この二つの意味が同じ重要度では用いられていなかったのである。例えば、スペイン語 patetico、イタリア語 patètico、英語 pathetic は「悲痛な、悲愴な」という②の意味しか掲載されていない辞書が圧倒的に多い。1-2 で言及した大田黒元雄を含めて、ベートーヴェンのピアノソナタやチャイコーフスキイ第 6 交響曲の日本初演に関わった 20 世紀初頭の人々が手にしていた辞書も、これら 3 ヶ国の中のどれかである可能性が高い。

一方、ドイツ語 pathetisch とフランス語 pathétique は事情が若干異なっていて、②も掲載してはいるが、①の意味をメインとしている辞書が多い。ドイツ語を母語とするベートーヴェンがフランス語の副題出版を許したのも、両者に差異がないからだったと考えられる。

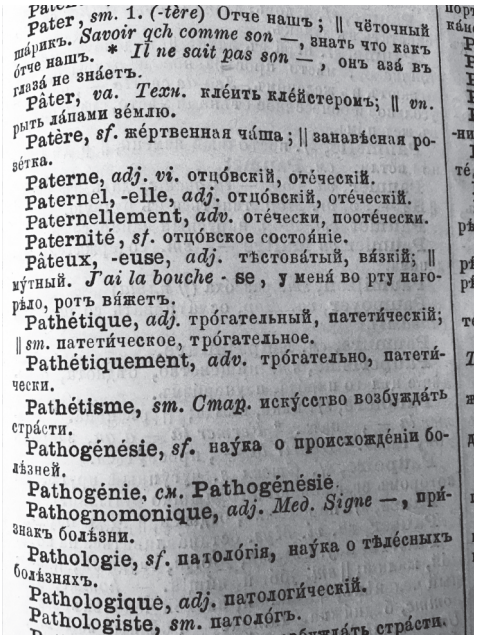
極めつけはロシア語である。В.И.Даль [V.I.Dal'] (1801-72) が編纂した『大ロシア語詳解辞典』(1863-66) は現在に至るまで最も精度の高い基本文献と見做されているが、そのダーリの辞書 1903-1909 年版のリプリント版である 1994 年版・1998 年版・2010 年版のどれにも、上記①の意味しか載っていない。つまり、ロシア語 патетический [pateticheskij] は②の意味を持たないのである。となると、②の意味も若干帯びているようなフランス語と、①の意味でしか用いないロシア語とを、何故チャイコーフスキイは自筆譜総譜に書き込んだのだろう？

新たな疑問が沸いてきたので、手始めに現在入手可能な仏和辞典へもう少し突っ込んでみた。1957 年初版のスタンダード佛和辞典（大修館）には「話や調子が）感動させる、悲壮な」、1986 年初版のプチ・ロワイヤル仏和辞典（旺文社）には「悲壮な、強く感動させる」、2003 年初版のディコ仏和辞典（白水社）には「感動的な・心を揺さぶられる、悲壮な」、2015 年初版のクラウン仏和辞典（三省堂）には「悲壮な」のみで、新発見はなかった。欧州言語から遠い日本語を介しているからはっきりしないのだろうか？　私はロシア語使いのプロだがフランス語は素人で、仏仏辞典にまで手を伸ばすことは難しい。ならば仏露辞典を調べてみよう。19 世紀のチャイコーフスキイの世界へ戻ってみることにした。

2-2　チャイコーフスキイ時代の意味

筆者はモスクワのロシア国立図書館（旧称レーニン図書館）で、19 世紀に使われていた仏露辞書を調べた。その結果、19 世紀を通じて最も普及していた仏露辞典は Н.П.Макаров [N.P.Makarov] が編集した仏露辞典と判明し、1870 年に初版が出されてから 1917 年のロシア革命まで、17 版を重ねていた。チャイコーフスキイは 1840 年生まれ、第 6 交響曲を作曲したのが 1893 年なので、彼が日常的に目にしていた仏露事典が Makarov 版である可能性は高かった筈だ。その全ての版で、フランス語 pathétique には「трогательный 心を揺さぶられる、патетический 感動的な」とのみ書いてあったのである（図版 1）。

図版 1


Pater, sm. 1. (-tère) Отче нашъ; || чёточный шарикъ. Savoir qch comme son —, знать что какъ отче нашъ. * Il ne sait pas son —, онъ аза въ глаза не знаетъ.
Pâter, va. Техн. клеить клейстеромъ; || vn. рыть лапами землю.
Patère, sf. жертвенная чаша; || занавѣсная розетка.
Paterne, adj. vi. отцовскій, отеческій.
Paternel, -elle, adj. отцовскій, отеческій.
Paternellement, adv. отечески, поотечески.
Paternité, sf. отцовское состояніе.
Pâteux, -euse, adj. тѣстоватый, вязкій; || мутный. J'ai la bouche - se, у меня во рту нагорѣло, ротъ вяжетъ.
Pathétique, adj. трогательный, патетическій; || sm. патетическое, трогательное.
Pathétiquement, adv. трогательно, патетически.
Pathétisme, sm. Стар. искусство возбуждать страсти.
Pathogénésie, sf. наука о происхожденіи болѣзней.
Pathogénie, см. Pathogénésie.
Pathognomonique, adj. Med. Signe —, признакъ болѣзни.
Pathologie, sf. патологія, наука о тѣлесныхъ болѣзняхъ.
Pathologique, adj. патологическій.
Pathologiste, sm. патологъ.

マカーロフの仏露辞典から

以下、レーニン図書館で筆者が確認したマカーロフ仏露辞典 pathétique 掲載ページを記す。第 1 版（1870）は上下 2 巻本の体裁でその下巻 206 頁に掲載されていた。第 2 版（1875）は少し体裁が変わり下巻 201 頁に、第 3 版（1881）・第 4 版（1884）・第

5 版（1887）・第 6 巻（1890）は全く変わらず、pathétique は全て下巻 201 ページに掲載されていた。第 7 巻（1894）からは 1 冊に纏められて 773 頁に、以降第 17 巻（1917）まで変更なしに、pathétique は 773 頁で「心を揺さぶられる、感動的な」の意味として掲載され続けた。念のために、チャイコーフスキイ死後の仏和辞典も 2 種類確認した。一つは Ранцов 編集（1903）、もう一つは Фон-Дитмар 編（1904）の仏露辞典で、ともに pathétique の意味はマカーロフと全く同じだった。

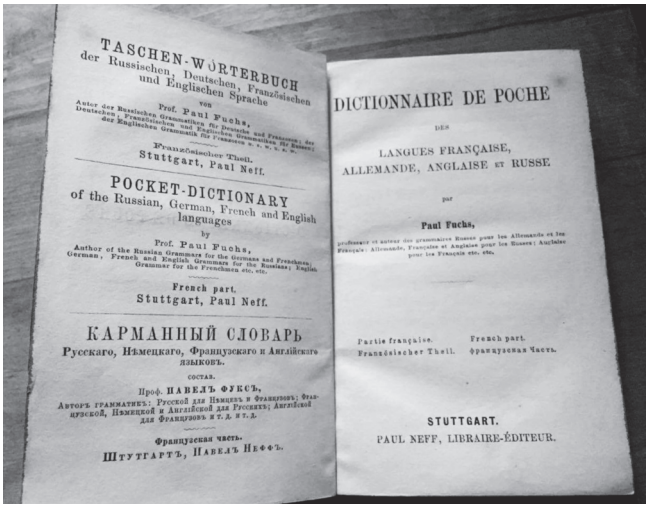
さらに念には念を入れて、モスクワ郊外のクリンにあるチャイコーフスキイ博物館でチャイコーフスキイ自らが愛用していた仏和辞典を手に取る機会を得た。中表紙（図版 2）を見ると、シュトゥットガルトの出版社から出ていて、フランス語の見出し語に対してドイツ語・英語・ロシア語の意味が掲載されているものだ。ポケット辞典とはいえ、情報量は多い。pathétique の掲載ページ（図版 3）も確認できて、どの言語にも「悲壮な」という意味がない前提でチャイコーフスキイがこの単語を副題に付けたことが明らかとなった [8]。

3. 誤邦訳《悲愴》から見えてくること

3-1 日本の現状

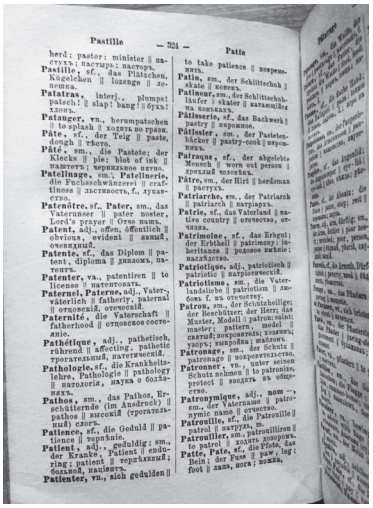
情報が乏しかった戦前の先達の仕事を批判するつもりは毛頭ない。それより現代の研究者たち、日本の「悲愴」訳支持者たちには猛省を促したい。彼らはフランス語の意味を確認していなかった。また、チャイコーフスキイ研究者・ロシア音楽研究者を名乗っていても、自筆譜（次ページ図版 4、5）を確認せずに博士論文や辞典項目を執筆していたという恐ろしい事実も発覚した。皆、筆者が 1990 年に「悲愴は誤訳ではないか？」と唱え始め

図版 2



チャイコフスキー愛用の仏語辞典

図版 3

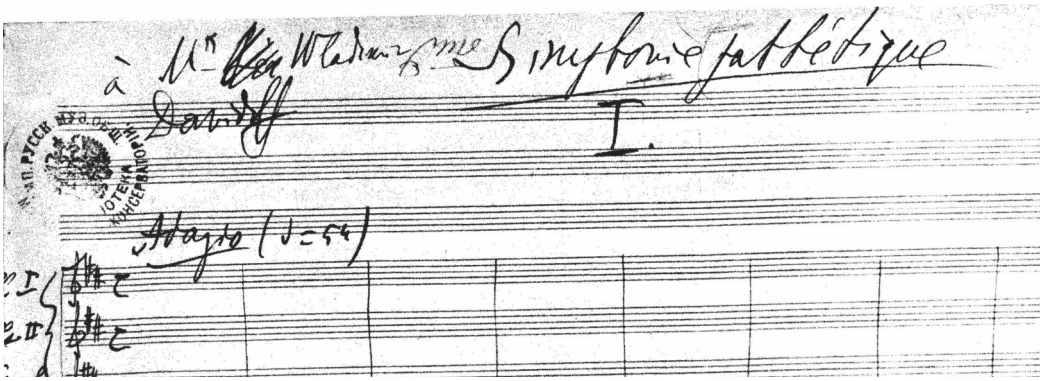


pathétique の掲載頁

たあとの出来事である。もしロシア語 патетическая とフランス語 pathétique が異なる意味を持っていたなら、チャイコーフスキイは何故並べて自筆譜に書き込んだのか？　意味に違いがないからこそ、彼は安心して 2 カ国語で副題を書き込んだのではないかというごく自然な推論に、何故彼らは到達することが出来なかったのか？　一次資料を調べることなく、出典不明の活字データやネットでの怪しげな情報のみを学者・研究者が鵜呑みにして良いはずがない。

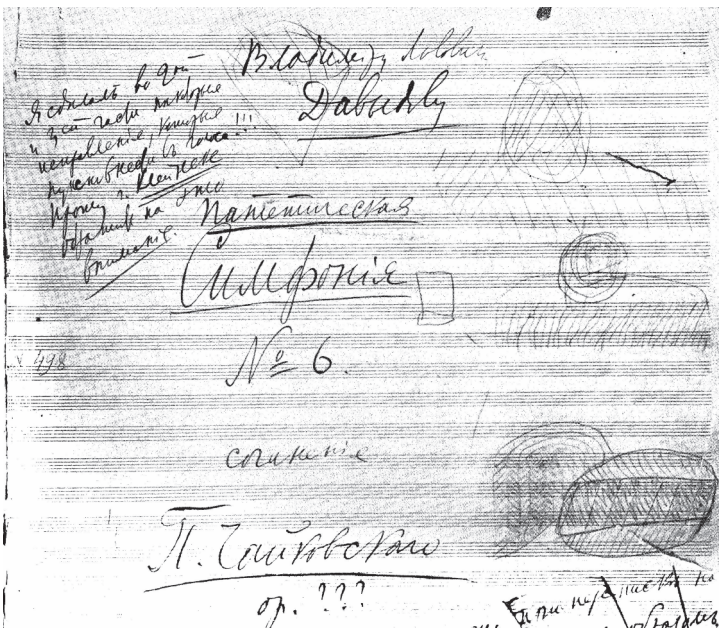
「悲愴」訳の熱烈な支持者の一人である小松佑子氏は、2017 年に自費出版した大部のチャイコーフスキイ論 (9) で、チャイコーフスキイの手紙を引用して「pathétique とフラン

図版４



第６交響曲第１楽章冒頭

図版５



第６交響曲表紙

ス語を使用している（図版6）から悲愴と訳して問題ない」と、筆者に真っ向から反論した。チャイコーフスキイの書簡を引用している点は研究者の方向性として間違ってはいないが、チャイコーフスキイの書簡は曲者で、相手によって文体も内容も書き分け、必ずしも事実や本心を綴っているわけではないことは、拙論「知られざるチャイコーフスキイ」[10] でも言及済みである。しかも、これまでの検証から、小松氏のこの議論は「フランス語での意味を未確認、チャイコーフスキイはロシア語も併記していた事実を知らない」という二重の欠陥を抱えた誤ったものであると結論が出ている。2005年にカワイ音楽出版から出た『ロシア音楽事典』のチャイコーフスキイ第6交響曲執筆者の千葉潤氏とも直接話をしたが、小松氏と同様の知識しか持ち合わせておらず、千葉氏はいまだに「悲愴」という誤訳を何の疑問も抱かずにあちこちの曲目解説で用いている。

図版6

十月十八日、チャイコーフスキイはユルゲンソーン宛に手紙を書いた。「交響曲のスコアーの表紙には次のように示して下さい。

ヴラディーミル・リヴォーヴィチ・ダヴィドフへ
交響曲　悲愴（Symphonie pathétique）
（第六番）
作品？？？
P．チャイコーフスキイ作曲」

交響曲の標題はロシア語ではなく、フランス語で書かれている。

小松佑子著『チャイコフスキー伝』下巻p.431

3-2　ロシアにも罪はある

日本のロシア音楽研究者が不勉強なのは確かである。しかし、この「悲愴誤訳問題」に限って言えば、ロシアにも罪はある。

交響曲第6番はチャイコーフスキイが生前完成させた最後の作品で、また、指揮者として最後に指揮台に立った曲でもあった。1893年2月作曲開始、オーケストレーションを完成させたのが8月で、初演は10月28日。当時チャイコーフスキイが居を構えていたクリンに近いモスクワではなく、ペテルブルグでの演奏会だった。そしてその9日後の11月6日、自宅へ戻ることなく、コレラによる肺水腫で急死。13日後の11月19日に作曲家の突然の死を悼んで第6交響曲が再演された際に、指揮者でチャイコーフスキイとも音楽的に近しかったナープラヴニーク（1839-1916）がかなり遅いテンポ[11] で終楽章を指揮したことから、第6交響曲は葬送の音楽という先入観が生まれ、さらに、ロシア人音楽学者による「チャイコーフスキイは同性愛を苦に服毒自殺した」という説まで誕生した。実際、ソ連時代に入ってからは共産党の要人の葬儀で流される音楽がチャイコーフスキイの第6交響曲終楽章だったという伝聞があり、少なくともスターリンが1953年3月5日に亡くなった翌日からの葬儀では、ソ連邦国歌の演奏と共にチャイコーフスキイの第6交響曲終楽章が随時流れていたと、筆者の知人でピアニストのメルジャーノフ（1919-2012）が語ってくれた。

自殺かもしれない突然の死と、葬送の曲としてソ連時代に使われていた事実は、ロシア語 патетический [pateticheskij] の邦訳が長い間「悲愴」のまま放置されていた遠因にもなった。1980－90年代に筆者が参加していたロシア音楽の勉強会[12] でも、ロシア音楽研究者と言われる人々が悉く、チャイコーフスキイの自殺説と「悲愴」を結びつけて解釈し、

自殺説は要検証、「悲愴」は誤訳という筆者の意見には誰一人耳を傾けてくれなかった。その後、死因は米ロの学者たちによって自殺説が完全に覆され、「悲愴」誤訳説が後押しされる環境が整っていった。

4. 日本のロシア音楽研究者への戒め —— 終わりに代えて

本説の冒頭でも言及したように、日本のロシア音楽研究者を名乗る人々は、音楽研究を座学と捉えて実際の楽譜を確認したり音楽を聴いたりという、研究者として最も重要な行為を無視する傾向にあった。

ロシア音楽は日本で大変人気があり、演奏会に掛けられる機会も多いが、研究者の数はドイツ・フランスやイタリア語圏に比べて圧倒的に少ない。その為、優秀な人材に恵まれず、資料の孫引きでその場を凌いだり、他人の訳したものを「てにをは」を変えただけで自分の訳と銘打って実績を水増しさせたり、素人同士が審査して得た学位を積み重ねて社会的地位だけは上昇させ、嘘を世間にばらまくという構図が出来上がっている。

筆者が最も驚愕した経験は、2018 年の音楽学会全国大会の時で、ロシアオペラ専門を看板に掲げる 40 歳代の女性研究者が、実はオペラ事典を翻訳しただけで実際のオペラの舞台は愚か、音源も聴かず、楽譜も見ずに、メディアなどに出演したり、沢山の文章を書いていたことが発覚した時だった。ロシアオペラで最も有名なムーソルグスキイ《ボリース・ゴドゥノーフ》の、幕開け直後のプロローグ冒頭民衆合唱を、その女性研究者は英語のオペラ事典のミスをそのまま踏襲して「プロローグ第 2 場」と博士論文に書き、その後もこの誤りを発信し続けた。彼女の博士号審査の際のオポーネントたちもロシアオペラには詳しくないので、その誤りには筆者以外に気付く者がいなかった。しかし、ロシアオペラ研究者でなくとも、一般のオペラ好きや現場の歌い手たちなら、《ボリース・ゴドゥノーフ》プロローグ第 2 場は有名な戴冠式だということを知っている。つまりは、プロの演奏家や一般愛好家の常識水準にすら達していない人間が、ロシア音楽研究者を名乗っている——これが、過去半世紀にわたる日本のロシア音楽研究の姿だった。件の女性研究者には、音楽学会全国大会の席でフロアから筆者が誤りを指摘したところ、烈火の如く怒って反論したが、筆者が軽く論破してしまい、大変気まずい空気が流れた。後日、楽譜を確認した彼女は筆者に謝罪に来たものの、謝ればよい・訂正すればよいという問題ではなく、そもそも一次資料で確認もしない人間が研究者を名乗ること、そして関連のあるテーマで博士号という学位を授与されてしまう日本のお粗末な学位授与制度にこそ大いに問題がある。因みに、チャイコーフスキイ第 6 交響曲副題邦訳を「悲愴」と主張して譲らぬ小松佑子氏も、ロシア関連の社会人生活を長きにわたって送ったあとに、ロシア語力が鍵となる東京大学でチャイコーフスキイに関する文学博士号を取得している。無論、学位審査過程でこの分野の専門家である筆者は全く招かれず、オポーネントには彼女に有利な門外漢が名前を連ねた。

筆者の努力やロシア側の体制変化・情報公開の進展により、ここ十年で輩出した若手研究者は全く異なる研究姿勢でロシア音楽研究に臨んでいる。次々に素人が参戦するネット界の改革は難しいかもしれないが、少なくとも紙媒体――オペラ事典やロシア音楽事典の類――の刷新は火急に実現させたいと思っている。

チャイコーフスキイの交響曲第6番副題邦訳に関する問題にはこうした事情が凝縮している。自筆譜や音楽そのものを確認せずに、「チャイコーフスキイはフランス語で書いた」「ロシア語ではそうかもしれないが、フランス語はこうだった」という事実未確認の情報を、専門家たち自らが流していたという事実を再度指摘して、このノートを閉じる。

―― 注

（1） 17世紀後半～18世紀初めのロシア正教会の代表的知識人ロストーフ主教ディミートリイ（святитель Димитрий Ростовский (Туптало)）（1651-1709）が、その晩年（1708-09）に執筆した著作『分離派ブルィン信仰についての調書』（Розыск о раскольнической брынской вере）の中でも言及。この著書は、当時、正教主流教会から「分離派」（раскольники）と呼ばれていた教会反対派について書かれた最初の体系的な論争書である。なお、この脚注の文章は、古儀式派文献講読勉強会主宰者の中澤敦夫氏による。

（2） この場を借りて筆者自身が意訳(≒誤訳)した音楽作品名が一つあることを白状しておこう。それはプロコーフィエフの歌劇《Огненный ангел [Fire angel]》で、直訳は《火の天使》となる。だが、「ヒノテンシ」という日本語の据わりが悪いことと、作品の中でこのFireが激しく動的なイメージで展開されることから、筆者は《炎の天使》という邦題を付けて日本に紹介した。初めて日本国内に紹介された音源の解説でもこの点を説明しているので、《悲愴》や《革命》よりは罪が軽いのではないか。

（3） 井上登喜子「日本におけるロシア音楽受容の時系列ダイナミクス」発表資料から。2023年6月18日Zoom開催シンポジウム「近代日本の洋楽受容とロシア」

（4） 本論の初稿校正段階で、京都帝国大学音楽部交響楽団100年史を閲覧する機会があり、1921年11月11・12日の第14回定期演奏会でこの交響曲の当団初演が行われたことを知ったが、プログラムには副題邦訳が掲載されていなかった。つまり、1921年の時点で、第6交響曲を《悲愴》と呼ぶ習慣が日本には定着していなかった、と言える。

（5） 1954年発行の三省堂コンサイス露和辞典は、1977年第4版になっても2番目の意味として「悲愴な」を掲載し、実例としてチャイコーフスキイ交響曲第6番《悲愴》を挙げていた。その後、新たに出版された1988年の研究社露和辞典、1992年岩波ロシア語辞典、2015年小学館のプログレッシブロシア語辞典には、「バトスに満ちた、強い感動を起こさせる」の意味しか掲載されておらず、幸いなことに「悲愴な」の意味は完全に姿を消している。

（6） 筆者は日常的に通訳を行っており、日本で最も経験豊かな音楽通訳の一人であろう。これまでに、オーケストラや弦楽四重奏、殆ど全ての楽器の独奏レッスン通訳を経験し、特にロシア人は、延べ数ではなく実数で100人を超える音楽家の通訳を行っている。その中には、日本でたった一度しかレッスンをしなかった名ピアニストのプレトニョーフやアシュケナージも含まれている。

（7） https://ru.wiktionary.org/wiki/%D0%BF%D0%B0%D1%82%D0%B5%D1%82%D0%B8%D1%87%D0%B5%D1%81%D0%BA%D0%B8%D0%B9　このサイトそのものにも誤情報が含まれていたら、もはやお手上げである。

（8） 日本語版wikipediaでは、2023年10月末時点でも、19世紀当時のフランス語pathétiqueの意味を確認もせずに、チャイコーフスキイがフランス語で書いたのは事実だから「悲愴」は誤訳ではない、という論が堂々と展開されている。

（9） 小松佑子『我が愛するチャイコフスキー』2017、文芸社

(10) 一柳富美子「知られざるチャイコーフスキイ――読まれなかった『日記』のページから」、和光大学表現学部紀要 22 号、2022 年、37-50 頁。

(11) 第 6 交響曲終楽章のテンポ表示に関しても、30 年以上にわたって大きな論争が展開されている。残されたオーケストラ総譜自筆譜によると、チャイコーフスキイ自身は「アンダンテ」という歩く速度のテンポ指示を終楽章冒頭に書き込んで初演を指揮したが、別の筆跡で「アンダンテ」の上に「アタージョ」という遅いテンポ指示か書き込まれた。この「アダージョ」原稿が楽譜出版社へ渡り、以降、終楽章は世界中で「アタージョ」で演奏されるようになった。1990 年のチャイコーフスキイ生誕 150 年を機に、チャイコーフスキイのオリジナルを見直す動きが生まれ、紆余曲折を経て、2013 年からの新チャイコーフスキイ全集へと繋がっている。

(12) ロシア・ソヴィエト音楽研究会第 27 回例会「近年のチャイコーフスキイ研究展望」1991 年 4 月 7 日、於神田新世界レコード社